

●アウシュヴィッツ、ルターとバツハを訪れる旅

4月11日～21日の「アウシュヴィッツとルターとバツハを訪れる旅」から無事ハンブルクに戻りました。今回は、実に内容の濃い、大きな祝福に満ちた旅となりました。お天気にも恵まれ、食事もおいしく、ホテルも素晴らしく、参加者の多くが60～80代の方々でしたが、皆さんとてもお元気に、旅行を楽しまれました。お祈り、ほんとうにありがとうございました！

今回の旅行は、テーマ全体が福音を語るものでした。そして、食事の時もバスに乗っているときも自由に福音を語り合える雰囲気にも包まれ、素晴らしい霊的交わりと伝道の時となりました。ノンクリスチャンの方々も、旅の終わりには、「この世の終わりにはキリストが語られたことがすべて成就するのではないかと思う」「今までクリスチャンを見てキリスト教を裁く思いがあったが、人ではなく、キリストを見なければいけないことが分かった」「昨年からは聖書を読み始めた。」「朝のデポジションのみことばと賛美にとっても慰められ、大きな力をいただいた。これからは聖書を読み続けてゆきます」と、皆さん、救いまであと一歩、といった感じでした。どうぞ、この皆さん(Nさん、いとこ夫婦、父)の救いのために、引き続きお祈りください。

以下、旅のレポートを報告させていただきます。とても長いので、どうぞ、お時間のあるときに少しずつ読んでいただければ幸いです。

●アウシュヴィッツ



- 1.アウシュヴィッツ入口、門の上には ARBEIT MACHT FREI=働けば自由になる、という文字が掲げられている。
- 2.映画「シンドラーのリスト」の撮影にも使われたアウシュヴィッツ第2収容所ビルケナウの死の門。ヨーロッパ各地から貨物車でユダヤ人たちがここに送られた。貨車から降りた人々はすぐに右と左に分けられ、70%の人々は直接ガス室に送られた。他の 30%は、労働者、生体実験のために選ばれた。
- 3.囚人たちが刈られた髪の毛、大量の髪の毛はドイツの衣料品会社や絨毯会社に売られ、糸や毛糸に加工された。

写真下.仲間の脱走を助けたために、見せしめに絞首刑にされた囚人たち。

ヒストリーとは His Story、つまり神のストーリーだとおっしゃる方がいらっしゃいます。悲惨な事実、私たちは往々にして目を伏せたいものですが、もし人類が犯した大きな罪の現実を見てゆかなければ、私たちはいつかまだ同じ過ちを繰り返すことになるでしょう。そう言った意味で、20世紀にアウシュヴィッツ絶滅収容所ほど大きな悪の力が働いた場所はないでしょうし、ここほど、あの時の事実を今に至るまで出来る限り正確に伝えようとしているところもないと思っています。

3年前にゴスペル・シンガーの森祐理さんとここを訪れて以来、アウシュヴィッツでの出来事をさらに知るようになりました。昨年、メルマガで紹介させていただいたことのあるラケルも、この生存者です。昨年再会したラケルに、2007年にはまたアウシュヴィッツを訪問する予定だと伝えると、彼女はこう言いました。「あの博物館の髪の中には、私の髪の毛も混じっているはずだよ」。囚人達が刈られた髪の毛を見ながら、ラケルのこと、以前お会いしたホロコースト生存者の方々のために、また、ユダヤ人の救いのために祈らずにはいられませんでした

ホロコーストに関しては、これまでのメルマガでも何度か紹介させていただきましたので、興味のある方はどうぞ以下のアドレスを開いてお読みください。

[メルマガ 35号\(ガス室で使われた毒ガス、チクロンBについて「死の家から生の家へ」\)](#)

[メルマガ 36号\(ホロコースト生存者の集い\)](#)

[メルマガ 43号\(ナチス犠牲者展\)、メルマガ 45号\(ナチスの中国人迫害\)](#)

[メルマガ 47号\(映画「シンドラーのリスト」に出てくる収容所所長、アモン・ゲーツの娘モニカ\)](#)

[メルマガ 63号\(アウシュヴィッツ解放60周年記念会\)](#)

[メルマガ 93号\(アウシュヴィッツ生存者ラケルのこと\)](#)

## ●マルティン・ルターの足跡



今回は、宗教改革者マルティン・ルターの生まれ故郷アイスレーベン、修道士、司祭時代のエアフルトの「アウグスティヌス修道院」、ルターが1517年に城の教会の扉に95ヶ条の提題を打ち付けたヴィッテンベルク、新約聖書を翻訳したヴァルトブルク城を訪問しました。

今回、実際に、彼が生きた地を訪れ、ルターの信仰の息吹を肌で感じる事ができました。ヴィッテンベルクのルター・ハウスの講堂には、sola fide(信仰によってのみ)ということばが掲げられていました。

ルターは、エアフルトの大学で法律を学んでいた時、激しい雷に遭い、「サンタ・アンナ、助けてください！ そうしたら、私は修道士になります」。という誓いを立てます。その2週間後、彼は、当時、もっとも戒律の厳しかったことで有名な、エアフルトのアウグスティヌス修道院に入りました。

ルターは、1505年7月17日、礼拝堂の祭壇前の床に埋められている祭司の墓の上に十字架状になって伏し、この世に死に、自分を神に捧げる誓いを立てました。その墓に葬られたていたのは、神学者であり、当修道院長であったヨハネス・ザハリアでした。ザハリアは、チェコの宗教改革者であったヤン・フスと神学論争し、ヤン・フスに異端宣告を下したした人です。伝説では、ヤン・フスはザハリアに、「今日あなたたちはこのガチョウ(フスとは、チェコ語でガチョウという意味)を丸焼きにするだろうが、その灰は白鳥となってよみがえるだろう。」と言ったと伝えられています。ヤン・フスは、1415年のコンスタンツ会議で異端宣告(=死刑宣告)を受け、その地で火あぶりの刑に処せられました。ヤン・フスの灰は、ライン川にまかれたそうです。

奇しくも、ヤン・フスに異端宣告(死刑宣告)を下したヨハネス・ザハリアの墓の上で献身の誓いを立てたルターが、後に、人はただ信仰によってのみ神の恵みを受け取ることができるという確信に至り、ヤン・フスの精神を受け継ぐ者になりました。しかも、ルターがヤン・フスの教えを肯定する意見を述べたのは1521年のヴォルムス会議で、ヴォルムスは、奇しくもヤン・フスの灰がまかれた、ライン川沿岸の町です。以来、ヤン・フスのよみがえりとして、白鳥が宗教改革者ルターのシンボルとなりました。

ヴォルムス会議にて破門威嚇を下されたルターは、フリードリヒ・ザクセン賢王にヴィッテンベルク城にかくまわれ、城の一室で新約聖書を翻訳しました。彼の伝記映画でこう語るシーンがあります。「聖書翻訳に大切なのは美しいことばではない。最も大切なのは、神が何を語っておられるかである。」「聖書は母が子に語るようなものでなければならない。」マルティン・ルターは12年かけて新旧全巻を翻訳しました。神の語られることを忠実に、しかも母が子に伝えるように、万人に分かるような翻訳をしたルターの聖書は、今なお最高のドイツ語訳聖書として、ドイツ語圏で用いられているものです。

(ケートヒエン)

修道士であったマルティン・ルターが、修道女カタリーナ・フォン・ボーラと結婚したことは、一大センセーショナルな出来事でした。ルターはケートヒエン(カタリーナの愛称)と幸いな結婚をし、6人の子どもを儲けました。ルターがヴィッテンベルク大学の神学教授をしていた時には、ルターの講義を聴くため、200人しか入らない講堂の後ろには、毎日400~600人の聴講生が集まったと言われています。太っ腹であったルターとケートヒエンは、沢山の学生を家に住ませました。子どもとたくさんの居候学生をかかえながら、家の一切を取り仕切り、経済的に困窮したときも、ケートヒエンは一切愚痴をこぼさなかったそうです。良妻賢母であるケートヒエンを、ルターは心から敬愛し、旅に出るたびに「私のあばら骨であり、女主人であり、いのちであるケートヒエン」へ頻りに手紙を書き送ったそうです。

## ● バッハの足跡







写真上 1. ドルンハイム、バルトロメウス教会の青年バッハの像の前で、バッハとマリア・バルバラが結婚式を挙げた教会

写真下左から、2・バルトロメウス教会のとても印象的な十字架のキリスト像(15世紀作) 3. ライプツィヒ、トーマス教会、バッハはここで27年間カントールを務めた 4. ライプツィヒ、ニコライ教会で素晴らしいオルガン演奏を聴かせてくださったヴォルフ氏(下から二段目左)

ルターの足跡に重ねて、私たちは、バッハが生まれたアイゼナッハ、マリア・バルバラと結婚式を挙げたドルンハイムのバルトロメウス教会、27年間カントールを務めたライプツィヒのトーマス教会、ニコライ教会等を訪れました。

#### (ニコライ教会)

旅のハイライトは、ライプツィヒ、ニコライ教会で、教会専属オルガニストであるユルゲン・ヴォルフ氏の感動的なオルガン演奏を聴かせていただいたことです。ヴォルフ氏は、日本のN響や大阪フィルにも指揮者として招かれている大変優れた音楽家で、私たちのために、バッハの「トッカータとフーガ」、「アダージョ」、そして20世紀のフランス人作曲家バリーの「旅立ち」を演奏してしてくださいました。

ニコライ教会は、東西統一のために大きな貢献を果たした教会です。この教会では、80年の初めから毎週月曜日、東ドイツの軍備拡張に対して、平和の祈りが捧げられるようになりました。この祈り会には、特に多くの若者が集まるようになりました。そして迫害と教会への道路封鎖と逮捕が続く中、1989年10月9日には、2000人の人々が教会の祈りに集まったのです。その中には政府から偵察のために送られた多くの共産党員も混じっていました。しかし、教会は、このときこそ共産党員が福音を聞くチャンスだと逆に喜びました。そして、2000人が教会を出たとき、広場には数千人の市民が手にろうそくを持って彼らを待ちかまえていました。ろうそくを片手に持つと、もうひとつの手はろうそくの火が消えないように風を遮らなければなりません。つまり、彼らは手に武器を持っていないことを証しながら、非暴力で、ニコライ教会の祈り人と共に平和を訴えたのです。その一ヶ月後の11月9日、ついにベルリンの壁が崩れ、東西統一へと導かれたのでした。

#### (アイゼナッハのバッハ・ハウス)

アイゼナッハの「バッハ・ハウス」は、改築オープンの一ヶ月前ということもあって、一部工事中だったのですが、新館の中はほとんど出来上がっていました。そこで私たちは、ライブではありませんが、再び感動的なバッハの作品の演奏を聴くことができました。新館の2階には、円形に囲まれた大きなスクリーンが設置されており、私たちが手すりに触れると、画面からゲバント・ハウス室内楽団の演奏が写しだされました。左側では、ケルンバレエ団のダンサーが曲に合わせて踊っています。2曲目は、トーマス教会聖歌

隊とゲバント・ハウス管弦楽団演奏の「クリスマス・オラトリオ」です。歓喜のティンパニーが響き、歓喜にあふれた合唱が始まります。

♪喜び叫べ、喜び踊れ、この日をほめたたえよ、いと高き方が今日成してくださったみ業をほめたたえよ！

恐れを捨て、嘆きを焼き尽くし、叫びと歓喜の声で高らかに歌え！ ♪

その感動的な賛美に、ポロリと涙がこぼれました。

バッハの時代は、120年に亘った農民戦争はすでに終結を迎えていたものの、そのために、ドイツは貧窮状態に陥っていました。教会では領主が決めた宗派以外は認められず、特にルター派と改革派は対立状態にありました。貧しさと病の中、子どもが生まれても半分は死に絶える時代でした。その試練の中で神に従っていった人々が生み出した賛美は、確固たる信仰と、実に大きな励ましと慰めと喜びに満ちたものです。特に、神の栄光のために作曲されたバッハの礼拝音楽は、今だにどんな作曲家も越えることの出来ない素晴らしいものです。

---

ドイツとは、霊的な意味で、神の力と悪の力が激しく戦う戦場のような場所です。ドイツはいつも「ローマ帝国」を夢見、ヒトラーは第三帝国を築きあげようとして失敗しました。いつか北方からイスラエルに進軍するエゼキエル書 38:6 の「ゴメル」は、現在のドイツ(ポーランド、チェコ、スロバキアも含まれるという説もあります)です。その火種が、復興ローマ帝国の象徴ではないかと思われる EU の中心国ドイツに、長い歴史の間常に燃やされ続けてきたこと、その中で繰り広げられてきた His Story、つまり神のみ業を垣間見ることの出来た、非常に意味深い旅行となりました。

そして今、自分がドイツに住んでいることに神のご計画があることを思い、この国とドイツ人の救いのために、もっと真剣に祈ってゆかなければならないと思わされています。

日本の皆様は、どうぞ祝されたゴールデン・ウィークを過ごされますように！  
皆様の祝福を心から祈っています。

工藤篤子